



「『翳り』は細部までこだわりました」と阿部さん

輝いています

ひと

彫刻家

あべまさよし
阿部昌義さん

その手が映しだすものは

「彫刻家として、藤の芸術文化の発展を手助けしたい」。そう語るのは阿部昌義さん(57歳・北町2丁目)です。阿部さんは埼玉県公募美術展覧会で過去に県知事賞、教育長賞、議長賞を受賞し、その実績から「委嘱作家」に。そして今年出品した「翳り」が、委嘱作家の最高賞である県美術家協会会長賞を受賞しました。幼少期から大工の叔父さんが家を作り上げる姿に憧れていた阿部さん。物づくりへの愛着と好奇心から、自然と構想する力が身に付いていました。高校2年生の冬、先生にその才能を見いだされ、美術大学の受験を勧められます。絵画にも興味があった阿部さ

んですが、ふと、鑿を手に誰かの「想い」を形にする叔父さんの姿が思い浮かび、彫刻科への進学を決意。大学院まで基礎を学び、卒業後は現代彫刻美術館の学芸員として勤務しながら、繊細な表現を追求していきます。本格的な制作の拠点を探していた時、偶然立ち寄った藤市展で美術を通じて人のつながりに感激し、平成26年、藤市に自宅兼アトリエを構えることにしました。学芸員の仕事の傍ら、年間10点ほどを生み出す阿部さん。「作品からストーリーや景色を自由に感じてほしい」という思いを込めながら、粘土を削っては足を繰り返して、指先の感覚が納得するまで突き詰めていきます。制作に4か月を要した力作「翳り」で表現したのは、日々の不安や心配、世の中の震えを敏感に感じ取る女性です。優しく握られた手に目を落とし、その中に思いをはせる。その、さりげないしぐさに情景を託しました。彼女の手の中にあるものは、「創作意欲とカタチの追求に終わりはありません。阿部さんの作品は、鑑賞する人一人ひとりの「想い」をいつまでも映し続けるでしょう。」

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

—No.89—



暁斎筆「猫と遊ぶ二美人」軸装

本作品は現在の展覧会で御覧いただけます

袖に鹿の子絞りで波頭文様を描いた赤い着物を着た女性が、糸の先につけた毬を動かして猫を遊ばせ、奥では緑の縞地に夕顔の葉と蔓をデザインした着物の女性が、猫を抱きかかえてその様子を眺めています。本図は暁斎の娘で日本画家の河鍋暁翠(1868-1935)が父・暁斎の下絵を参考にして描いた作品です。暁斎は二人を遊女の姿にしていますが、暁翠は髪型や装いを良家の子女に変え、品格のある美人図として描き出しています。

河鍋暁斎記念美術館 開催中(25日まで)
企画展「生誕155年 河鍋暁翠展」
同時開催 特別展「『狂斎百図』の世界」



詳しい内容は美術館のホームページを御覧ください

開館 = 午前10時～午後4時
休館 = 火・木曜日、毎月26日～末日
ところ = 南町4-36-4
入館料 = 一般600円 高校生・大学生500円
小・中学生300円 65歳以上500円
※65歳以上は年齢の分かる物、学生は学生証をご提示ください
詳細 = 同館 ☎441・9780



現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
～明治22年(1889)